震災の経験で、気づいたもの、傷ついたもの、得たもの

西澤　博（仙台市水道局総務部経営企画課経営企画係長）（当時所属：計画課）

〇震災当時の業務

・総合調整班

現場からの情報をもとに技術管理者に判断を仰ぐ、万歩計をつけていたら歩数だけは無駄に多かったと思う。数少ない情報は足で収集することが肝要と知った。

発災当初は少なかった情報量が、発災数日後になると一気に多くなった。甚大な被害だったため、多くの個別情報から全体像を想像するのは大変だった。

復旧の進捗が見えないため、復旧状況が一目瞭然となる図面を日々作成した。職員のモチベーションアップや市民からの問い合わせに対応した。

・市民への広報

日を追うごとに市民からの電話問い合わせが増えてきた。仙台市ではブロック配水をしているため、大まかな住所だけでは、復旧見通しを市民に伝えらなかった。そこで、地番までの住所を入力すると断水状況や復旧予定日が分かるエクセルを作成し、局内で共有を図った。しかし、HP にエクセルや復旧図を掲載することは叶わなかった。

・災害査定に向けた準備

災害対応が一段落し、災害査定に向けた次のステップへ。災害査定の経験があったことから、そのまま 2 年間担当となった。災害査定も災害対応業務の一つであり、災害査定に向け業務量が爆発的に増える予感があったため、早い段階でコンサルタントとの共同作業に着手した。

〇震災当時の心境

・やるしかない

発災後 1 週間までは非日常への不安はあったが、一日でも早く水を市民に届けなくてはいけないという明確なミッションがあったため、やる気で満たされていた。

・ぎくしゃくした人間関係

１週間を過ぎたころから、衣食住などへの満たされないストレスフルな状況から、局内の人間関係がぎくしゃくしてきた。会議の発言が直球ストレートにしか言わなくなる。相手を思いやる余裕を失いつつあった。休むことと相手を思いやることもこういった時こそ大事だと思った。

・全国の仲間からの支援

応援事業体や昔の仲間などからの声援が励みとなった。本当にうれしかった。そのお陰で乗り越えることができた。

〇家族

・避難所へ

家族は、子供を室内の遊技場で遊ばせていた時に被災し、近くの避難所へ避難していた。幸運なことに水道局近くだったため、夜中の仮眠時間にデスクの引き出しにあったお菓子をポケットにありたっけ詰め込み避難所へ行った。広く暗い体育館で妻と子供の名前を呼びながら探した時は、改めて仙台も被災していることを実感した。

・家には帰れず

翌日に家族は家に戻ったが、私自身は被災後 10 日間家に帰れなかった。家族からは、定期的に連絡があり、なんとか生活はしていることが分かっていたので、業務に集中することができた。3 月、外は雪が降っていた中、職場では私も含め何人かが、恐怖の冷水シャワーを浴び、病んだ心身を清め、明日への気合を入れていた。

〇振り返って

・今後起こり得る宮城県沖地震に向けて

仙台市水道局では、災害対策情報発信プロジェクトチームを作り、被災の経験などを日本、世界中に伝えている。また、令和 2 年度からの仙台市水道事業基本計画では、2 度の被災経験（昭和 53 年、平成 23 年）を踏まえ策定している。

・感謝

発災後、少しずつこれまでの生活が戻ってきた。食事が、おにぎりに始まり、菓子パン、弁当と徐々に良くなっていた。特に牛乳が飲めた時と、温かいカレーを食べた時のことは忘れられない。通常の生活ができることのありがたさを忘れずに、これからの日々を過ごしていきたい。

長女は、プレハブの仮設校舎への登校。震災があった年の瀬、我が家には新しい命が生まれてきてくれた。次の世代にもしっかりと水道を継承しなければとあらためて気を引き締めた。

水道は、災害があると日本水道協会の枠組みで、全国から支援が来る仕組みが出来上がっている。これまで接点がなかった市町村などからも仙台に応援に来ていただき、日本全体が一致団結して災害復旧に取り組んでいると感じた。とても心強かった。

今後、南海トラフ地震等の発生が予想されており、今度は仙台市が被災都市を支えられるような恩返しをしていきたい。